続々

人間の道

――聖書を聞く――

松下昌義

途上社

続々人間の道　―聖書を聞く―

昭和５９年２月１日

著　者　松　下　昌　義
発行所　途　上　社
京都市左京区下鴨南茶の木町29

片　桐　印　刷　　頒価 1,000円
TEL (075)492—6652

序にかえて

――聞くということ――

「あなたがたは聞くには聞くが決して
悟らない。
見るには見るが、決して認めない。
この民の心は鈍くなり、
その耳は聞えにくく、
その目は閉じている。
それは、彼らが目で見ず、耳で聞かず、
心で悟らず、悔い改めていやされること
とがないためである。」

（マタィ福音書13章14・15節）

聖書を読むとき大切なことは、「聞く」態度であります。

「聞く」とは、語られし言葉のこころのひびきを、全身で受けとめ、そのこころと一つにな

ることであります。

上田万年氏の大字典によると、聞くとは、「耳声（みみこえ）を受くる也」とあり、さらに「聞くとは、先のことを此方にきくこと」である、とあります。どうやら聞くとは先方の声や音のこころのひびきが、自然に吾が内に入り、「聞こえる」こと、つまり受身であるようです。

それに対して「聴く」とは、同じく上田万年氏の大字典によると、「自分よりきく」ことであり、「先のことを自分より先方にきくこと」であります。つまり、客体を主体の中にとり込むことが「聴く」であるのに対して、「聞く」とは、主体が客体の中に入りこみ、客体が主体をつつみ、主体と客体とが一つになることであると言えます。

さて、文字にしても言葉にしても、それは人の心の深い世界から生れた思いを、形として文字化し、またその心をひびきとして言語化し現わしたものです。

文字とか言語とかは、それ自体は記号であり、音であるにしかすぎません。しかし、それらは、只の記号、只の音であるだけでなく、記号以前、音以前の人の思いの世界を、その記号、その音にたくして語っているものです。それ故に、わたしたちは、その記号としての文字、音としての言葉のこころのひびきを、全身で感応し同時に、そのこころのひびきに包まれ、ひびきと一体とならねばなりません。即ち読むとは「聞く」ことでなければ、本当に読んだとは言えません。

以上のことから言えることは、文字とか言葉とかは、それ自体であるのではなくそれらは、聞く者に出会ってはじめて文字となり言葉となるのだと言えます。

さて、人がよりよく聞くためには、聞く者自身は自我を空しうしなければなりません。

例えば、人が色めがねをかけてものを見るとき、その人がどれほど凝視しつづけても、そのものは色めがねの色に支配されて見えてしまいます。その場合、人がそのものを、そのものとして見ようとするならば、見る人は先ず、色めがねを取りはずすことが第一です。聞くとは正に、この色めがねを取りはずす行為であると言えます。そのとき、人は自ずと見ようとするものが、正しく見えてくるように、自ずと聞くべきことが聞こえて来るようになるのです。

しかし、人が自我の色めがねを取りはずすということは、決してたやすいことではありません。

自我の色めがねをはずす行為は、自我の上に知識を積みかさねるということではなく、むしろ、自己がつけている我という余分なものを、一枚一枚脱ぎ捨てる行為、自分の我をすりへらす行為、つまり、自分を研くということであります。

自分を研く、即ち自己研鑽するとき、自己の我の下地としてあった、本当の自己が自ずと現成して来ます。

本当の自己とは、利害得失を超え、常識的な善悪を超え、主観客観を超えた真実そのものの

ことであります。

聖書が文字や言葉に託して語り示す世界は、右に述べた真実の世界にほかなりません。この真実の世界は、すべての存在の根源の世界であり、すべての存在は、この真実を窮極に於て言葉し、語っている、つまり現わし示しているのです。

存在の根源の世界とは、生命たぎる世界、生命を生み出す創造の世界、すべてを包みおおう世界、はじめであり終りである世界、光りかがやく明るみの世界です。即ちこの真実の世界とはキリストの世界であります。

イエスさまは、正にこの真実の世界を真実そのものとなって、真実を言葉し、真実を行うじられたのです。即ち、イエスさまはキリストを生きられたのです。ここに、イエスはキリストであるという所以があります。また、神の支配を提示されたと言われる所以があります。そういう意味での神の子であると申せます。

イエスさまの弟子たちは、この真実を言葉され、行うじられたイエスさまにキリストを聞いて、触れて、かつ知って交わるものとされ、生かされ、さらに、それ故に世の多くの人々をも、その真実との交わりに生かしめようと願った人達です。（ヨハネ第一の手紙1章1節－4節）

パウロは、真実（キリスト）に目覚めしめられたとき、「キリストがわが内に在って生きている。」（ガラチヤ2章24節）と告白しました。また、古き自我を超えて真実の自己に開眼させら

れたとき「だれでもキリストに在るならば、その人は新しく造られたのである。古いものは過ぎ去った、見よ、すべては新しくなった」（コリント第二・5章17・18節）と申しました。

先に、文字や言葉は、聞く者に出会って文字となり、言葉となると申しましたがそれは、言葉は聞く者に出会って、言葉以上の言葉となると言えます。言葉以上の言葉とは、言葉の現れた部分と隠れた部分とが同時に現成することであります。そういう言葉を聞くことが大切です。これこそ言葉の真底に迫る聞き方であります。

わたしたちは聖書を読むとき、その文字や言葉の真底に迫る聞き方、即ち、聖書が文字や言葉に託して語り示す真実の世界に深く感応し、一つとなる聞き方をしたいものです。それを可能にするものは何か、ほかでもありません。真実に覚せしめる聖霊の働きのみです。

「真理の御霊が来るときには、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語る」（ヨハネ福音書16章13節）のであり、「聖霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるからである」（コリント第一・2章10節）と言われる所以です。

心を貧しくして御霊の助けにより自我を研くとき、我を超えせしめられ、聴く者から、聞こえる者へと覚せられるに至ります。

ここにまとめました一冊は、右のような求道の心で、毎週聞いたものを教会週報に記したものです。

ふりかえってみると、しかし未だ聞こえずの感いよいよ深くもつものです。

大方の知恵ある御指導を願うものです。

昭和五十八年七月十日

松　下　昌　義

1

「こころの貧しい人たちは、さいわいである。
天国は彼らのものである。」

（マタイ福音書　5章3節）

「聴くは行・聞こえるは信」とあるのを読み、「信仰は聞くによる」というパウロの言葉を思い出しました。

信仰とは「聞こえる」ということであります。例えば、霧が一面にたちこめて、周囲がよく見えない状態から、太陽や風が霧を追いはらい消しさることによって、周囲の風物が少しずつ見えてくるように、「聞こえる」とは、自分の中に一面はっていた霧が、少しずつなくなり消えていくことによって、「自分に語られていた言葉が聞こえるようになる」ということです。自分が聴こうとし努力して聞いたのではありません。自分の中に一面はっていた、「自分の我」という霧が無くなった時、おのずと、すでに語られている言葉が聞こえるようになったというのです。自分の中に一面はっている我のゆえに、すでに語り続けられているおめぐみの言葉が聞こえなかった。それが我という霧が無くなり、滅した時に聞こえるようになったというのです。こころが貧しくなるとは、正にこのことであります。神のあふれるばかりのお恵みと、祝福のかずかずが、すでに今、目前にあるのに、与えられ包まれているのに、それが我の故に見

えない、聞こえない。しかし、その我が貧しくなっていくにしたがって見えて来る、聞こえて来る。このことを「天国は彼らのもの」とイエス様は申されたのです。

わたしたちにとって大切なことは、一生懸命努力して聴こうとすることではなく、自分にすでに語られている恵みの言葉が聞こえるために、自分の我をすてて謙虚になり貧しくなることであります。

2

「悲しんでいる人たちはさいわいである。
彼らは慰められるであろう。」

（マタイ福音書　5章4節）

わたしたちの常識は、なぜ悲しむものが幸いなのだろうかと思う。

イエス様の言葉は、わたし達の日常の立場からではなく、今一歩人生をふみこんだところから語られる。表記の言葉もその例外ではありません。

ここでの「悲しむ」とは、わたしたちにとって、どうすることもできない悲しみ、押えても押えても涙が出て止まることを知らぬような悲しみ、どうにもこうにもやりばのない深い悲しみのことであります。あえて言うならば、無常の悲しみとでも言えましょうか。無常の悲しみ

とは、「あれがない。これがない。」「ああしてほしい。こうしてほしい。」というような悲しみではありません。人生のさまざまなことにふれ、それを機縁として「生きるって一体なんなのだろうか。」と深く、あらためて自分を考え、自分の生を想う。そして「生きるということは悲しいことだなあ」と、しみじみ覚ゆる、人生が何か空しゅう感じられる。そのような悲しみが無常の悲しみであります。

この無常の悲しみは、生きることの意味を求めることにつらなり、永遠に変わらないまことというものはないものだろうかという、求めるこころにもなるのであります。

それ故に、悲しむこころは、日常の凡々たる人生を超えて、深く自分自身の人生、生活の在りようの現実に目を向けさせることにより、まことなるもの、変わらざるものへの、求道の発心（ほっしん）の機縁となるのであります。それはとりもなおさず本当の平安、安心、慰めとの出会に至るのであります。イエス様が「慰められるであろう」と申された理由はここにあるのです。

3

「あわれみ深い人たちはさいわいである。
彼らはあわれみを受けるであろう。」

（マタイ福音書　5章7節）

愛する時愛が返り、怒る時怒りが返って来る。それと同じように、あわれみをもって他にかかわるとき、あわれみが自分にも返ってくるということは、大切な教えであり、わたしたちは日常の心得として、これをしっかりとわきまえておくことが必要であります。

しかし、表記のイエス様の言葉は、さらに一歩ふみ込んだ、まことのことがらについて語っていられるのであります。

「あわれみ深い」とは一体ここでは、どういうことを指して言っているのでょうか。それは、ただたんに外側に立って「ああ！　かわいそうだなァ!!」とおもうだけではなく、その人の立場、身になって、その人の思い、その人の感じ、その人の心になる。ということが「あわれみ」ということなのであります。これ即ち「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」（ロマ12・15）ということです。そして、さらに別な言葉で表現すれば「隨喜（ずいき）」ということになります。即ち、相手の喜びに自分が隨（した）がうことです。ここで見のがしてはならない大切なことは、「我」のこころが無いということです。自分の心は空っぽになって相手の喜び、または悲しみ、思いがいっぱ

になり、卒直に相手の心、立場に隠(しが)っているということ。これは、愛の極致であります。自分を空しうする姿であります。このような「あわれみ」の姿にひとが成る時、神様のお恵みが自然と見えてきますし、またその人の心の中に神様のお恵みがおのずと現成してくるのです。これが「あわれみをうけるであろう」ということです。

これは「行(ぎょう)」によって得る姿でなく、まさに「信」によって受ける姿であります。

4

「人々が、あなたがたのよいおこないを見て、
天にいますあなたがたの父をあがめるように
しなさい。」

（マタイ福音書　5章16節）

イエス様の教えを学び、その教えを了解し、信じるとき必ず次に行(おこな)いが生れて来るものです。行いとは、その人の心の内なるものが外にあらわされた姿であります。

「形」とは「あらわす」とも読みますが形は心を形（あらわ）したものであり、したがって形にならない心は未だ心ではないとも言えます。

「おおわれたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものは

ない」（マタイ10・26）とイエス様は申されましたが、心と形は一体だと申せます。

心だけがあるのではありません。わたしたちが「ある」ということは、心が形となってあらわされて「ある」のです。

わたしたちは、その人の言葉使い、顔いろ、その他いろいろな行いの形を見て、その人の心を判断します。わたしたちは、形だけを決して見てはいけません。常に形を通して心を見ていることが大切です。

心のさまが外に形となってあらわされたことを証（あかし）と呼んでいます。

世間の人々が神のご慈愛に気ずくきっかけを得るのは、神の御慈愛に生きる者の日常の形を見ることによってであります。

みずから自分の生活に現れた形を省りみて、己の心を反省してみたいと思います。

「信仰も、行いが伴わなければ、それだけでは死んだものである」（ヤコブ2・17）

5

「兄弟にむかって〝ばか者〟という者は、地獄の火に投げ込まれるであろう。」

（マタイ福音書　5章22節）

これは、きびしい言葉であります。だれもが、この言葉の前に立つとき地獄行きまちがいなしであります。

このイエス様の言葉は、わたしたちの慢心を打ち砕き自らが愚悪なる人間であることに気ずかしめます。

「ばか者」と兄弟に向って言うな!! と言うのではありません。兄弟に向って「ばか者」と言い、思わざるを得ない己れの現実を看よ!! と言われるのであります。罪悪深重なる自分の内を看よ!! と言われるのであります。

わたしたちはまことに不自由なるものであります。自分の内なるものの束縛にとらわれてその日々を歩むものであります。この内なる束縛からの解放なくしてまことの自己の解放はあり得ません。

まことの自己の解放はどうすれば出来るのでしょうか。それは、目覚める以外にありません。自分の罪悪深重なる現実に目覚めると同時に、その罪悪深重なる自己を一方的に、根本的に、徹底的に愛でもって包み、ゆるし、救いあげて下さっている神の愛に目覚める以外にありません。

自分が己れの内なる罪悪深重にたたかい、いどみ、それを克服するのではありません。罪悪深重なる己れの全存在をそのまま救いあげて下さる神の御愛、キリストの慈愛の中に自分を見出すことです。この一点に於て自分の今、今日、明日を見、さらに生死を見つめ、自覚して生

きる時、今が感謝であり、今日がありがたく、死も平安になるのです。

礼拝する者は、罪悪深重なるものということに於ては、すべての人と同じであります。しかし、神の愛、キリストの慈愛が、自分の足下に豊かに働いているという事実に目覚ましめられて礼拝する人々は、他の人々と全く異なるのであります。

6

「天の父は、悪い者のうえにも、良い者のうえにも
太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも
雨を降らして下さる。」

（マタイ福音書　5章45節）

神様の慈愛は善悪を合せ抱きかかえ、ゆるし救い給うところの大慈愛であります。

神様の大慈愛はただ善を喜び悪を許し給うというのみでなく、善に於ても、悪に於ても人間が、その根本に於て愛と憎しみとを離れることができない存在であること、そして、さらにその愛憎によって、自分の思いに反して思わぬ悪業に走り、罪を造るに至る悲しきものであることを悲しんで下さる。そして、そのような者であるこのわたくしを救って下さる。それ故に神は大慈愛なのであります。

わたしたちにも慈はあるかも知れません。また愛もあるかも知れません。しかし、それらは小慈愛であって、決して大慈愛ではありません。

わたしたちには大慈愛はありません。頭の中や、心のうちでそれを考え、また望むことは出来ても、生活の実際に於ては、あることはがたきことであります。にもかかわらず、この大慈愛が現に、只今この足下にまぎれもなくあるということは、なんと「ありがたき」ことであり、不思義なことでありましょうか。この神の大慈愛を「神はそのひとり子イエスを賜わったほどに、この世（私）を愛して下さった」（ヨハネ3・16）と聖書は語っています。

わたしたちが人生の日々に於て目覚めるべきことは多くありましょうが、この神様の大慈愛に目覚めることは無用のごとくであってその実、最も有用なもの、つまり無用の用なのではないでしょうか。最後に、表記の聖書の言葉と共に思い出す歌が一つあります。

「わずかなる庭の小草の白露を、もとめて宿る秋の夜の月」

神の大慈愛にただ感謝あるのみです。

7

「まず神の国と神の義とを求めなさい」

（マタイ福音書　6章33節）

神の国とは何か。神の義とは何か。また、それらをわたしたちはどこで見ることができるのか。

イエス様は、己れ自身を見よと申されます。即ち、自分の人生の日々を見つめ、空の鳥、野の花の生きざまを見つめてみよ、と申されます。（マタイ6・25～30）わたしたちが、自分の我をすてて、それらをじーっと見つめ続ける時、必ず、あふるる神の慈愛そのものを見出すことができるにちがいありません。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空は御手のわざをしめす」と古人は、己れの足下にある神の慈愛を見て、静かに合掌の心で告白しています。そして、さらに驚ろくべきことは、その神の慈愛が全てに及び、過去、現在、未来に至るまで言葉に非ざる言葉として、声に非ざる声としてみなぎっていることを確実に見ています。即ち、「語らず、言わず、その声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく、その言葉は地の果てまでに及ぶ」と。（詩100）

いろいろなことが起り、さまざまなことで悩み、思いわずらうのが私たちの日々であります。しかし、そのような日々のそのところに神の確かな慈愛が生きずき、みなぎっているのであります。この神の事実を凝視すること、それを自分のものとすること、それと一つになる生を生きること、その働きの命を自分の命として生きること、これが第一のことがらであります。

「先ず、神の国と神の義とを求めよ」とは、このことを言うのであります。

8

「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、
自分の目にある梁を認めないのか。」

（マタイ福音書　7章3節）

他人のことは自分のことよりよく見えるものです。とくに自分の欠点は見えなくても、他人の欠点はよく見えます。ですから、自分の欠点をたなに上げて、他人の欠点をあれこれと批判してしまいます。

もし、わたしたちがそれぞれに自分の欠点を見ずして　他人の欠点のみ指摘して批判ばかりしているなら、人と人との和はいつまでたっても生まれては来ません。

大切なことは、他人を見て批判することではなく、他人を見て、「ああいやだなあ」と思った思いで自分を見る時、他人よりももっといやなところがあることを発見するかもしれません。これ即ち、「他人のふり見て自分ふり直せ」ということです。

しかし、それよりもっと大切なことは、神の慈愛にふれて自分を見て他人を見ることです。神のまことを見れば、自分の汚さ、まこと心のないことなどがよくわかります。さらに、そのような自分であるにもかかわらず、今自分は生かされている。これはあたりまえのことではなく、神のゆるしのご慈愛によることであるということが、少しずつではあるが分って来る時、

はじめてわたしたちは、自然に他人をかんたんにさばくことをしなくなって来るものであります。

わたしたちはどのような汚い者であっても、神のご慈愛の中に生かされている者であります。このことに先ず気ずき、それから他人を見るべきであります。

9

「求めよ、そうすれば与えられるであろう」　（マタイ福音書　7章17節）

このイエス様のお言葉は、なんと慰めにみちたものでしょう。わたしたちが求めれば、与えて下さるというのであります。

しかし、誤解をしてはならないことは、これは、わたしたちが求めるがままに、それが与えられるということを言われているのではない、ということです。こちらが欲するがままに、ホイホイと、その欲求がかなえられ、みたされるというのではありません。もしそれが神だとすれば、神とは、なんのことはない我欲をかなえ充してくれる人間の奴隷にほかなりません。

では、「求めよ、そうすれば与えられる。」とはどういう意味なのでありましょうか。

問題は、「与えられる」にあります。この言葉はむしろ「応えられる」と表現すべき意味を

もつものだと思います。即ち、神様は、求める時必ず応え給う方である、ということです。しかも、その応えは求むる者の我欲を充して下さるというに非ず、「我欲」とは一切関係なく、真実、その求める者にとって最善である応えが与えられるということです。したがって、「我欲」に立つ者にとって「これは困ったことだ」「こんなはずではなかった」と思うような応えが与えられることだってあります。しかし、それも長い長い人生の日々という観点に立ってみるとき、その応えは最後には「これでよかったのだ」と知るに至るような応えを下さるということです。それ故に「我欲」をすてて、素直に与えられた道を安心して歩みたいとおもいます。

10

「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、
その道は広い。そして、そこからはいって行く者は多い。」

（マタイ福音書　7章13節）

門とは入口のことです。人々はそれぞれに、さまざまな門をくぐって、それぞれの人生の道を歩いて行きます。

イエス様は、狭い門と広い門との二つについて語っておられます。

広い門は見いだしやすく入りやすい、従って多くの人々がそこから入っていくが、狭い門は見いだしがたく、そこに通じる道も細いのでそこに入る者は少い。

広い門とは、わたし達の我欲を満足せしめることを第一としてつくられた道に通じる入口であります。それは、「困難に対して安易な道であり、時間のかかる遠い道に対して、時間をかけずして至る近い道であります。さらに、規律ある道に対して放縦な道であり、思慮深く歩む道に対して、それは思慮分別を欠いた道」のことであります。

たしかに、人は苦労困難をのりこえてこそ、ものごとの真実を体得することができるのであります。また、長い時間のつみかさねによって、ものごとの真実に体達できるのであります。さらに、規律ある生活、思慮深い生活態度によって、ものごとの真実が見えてくるのです。「ものごとの真実」が体達できたり、見えて来るとは一口に言って、人生の道理、また、人生の善悪、自分というものの本当の姿などがわかるということです。その時人間はおのずと感謝し、許しを願い、合掌するにいたります。正しい信仰は広い門の誤りを教え、狭い門へとわたしたちを導き、平安ある人生の道を歩ませます。

11

「すべての良い木は良い実を結び、
悪い木は悪い実を結ぶ。」

（マタイ福音書　7章18節）

「根にふさわしい実がなる」ということわざがあるそうです。これを聞いて〝なるほど〟と思う。この場合の実とは、ひとの日常の言動のことであり、根とは、その言動が生じて来るところの心の根のことであることは言うまでもありません。

大切なことは結果として現れる実ではなく、根であることがわかります。その人の心根（こころね）が豊かならばその言動も豊かになるに違いありません。

わたしたちは、心根を豊かにするように心がけねばならぬと思います。

「下農は雑草を作り、中農は作物を作り、上農は土を作る」という言葉が、農業をする人達の間にあるそうです。豊かに実らすためには、根をしっかりはらすための土作りを第一にしなさい、ということです。

大切なことは実ではなく、その実をならす根でありますが、さらに大切なことは、その根を豊かにはらすところの土であると申せます。

わたしたちの日々の生活をどこに根ざしてするか、ということで、その日々の生活の様はい

ろいろと変ります。

慈愛深き神様の豊かな土地に、自分の心の根をしっかりとはって日々の生活を送ること、即ち、万事を益にして下さる神のわが身に及ぶ御慈愛を信じて、そこを自分の土台として日々の生活をすすめて行くことこそ大切というものです。

「岩の上に家を建てた人は、雨がふり、洪水が押しよせて、風が吹いて家に打ちつけても、倒れることがない。岩を土台としているからである。」（マタイ7・25）とイエス様は申されます。

12

「そうしてあげよう、きよくなれ」

（マタイ福音書　8章3節）

「義人のためではなく、罪人こそを救うために来た」とイエス様は申されます。このイエス様のお考えの中には、第一に神に救われるべきものは義人ではなく、罪人こそ第一なのだ、という確信があります。義人こそ第一に救われるに価するものである、というのが世の人々の考え方であります。しかし、イエス様は全く正反対のお考えをもっておいでになり、事実、貧しい者、しいたげられる者、病人、子供、弱者、罪人たち、しかも、その当時の宗教家がすててかえり見る

ことなき、それらの人々に慈愛の手をさしのべられました。

イエス様は、世間が価値ありということに対して価値なしと申され、世間が価値なしということに対して価値あり、と申されるのです。そして、世間が価値なし、と言ったそのことから、本当の価値を生み出して下さる方なのです。

世間が価値なしと断じてすててかえりみなかったらい病人の願いに、「そうしてあげよう」と、らい病人の願いをそっくり肯定されるイエス様。強く生きたいと願うそのらい病人の願いを「当然だ」と肯定し給うイエス様。

らい病人の存在を価値ありと申され、そのらい病人の中から価値を生み出し給う。

「きよくなれ」と親しく手をおいて苦悩から立ち上がらせて下さるのがイエス様であります。誰もがふれず、誰もが知らず理解してくれない人の心の奥にやさしく手をさしのべ「そうしてあげよう、きよくなれ」と申されるそのご愛に目をそそぎ日々すすみゆきたいと思います。

13

「行け、あなたの信じたとおりになるように」　（マタイ福音書　8章13節）

信仰に於て大切なことは、なにをなすべきかということよりも、いかになすべきかというこ

とであります。

例えば、パウロは次のように語っています。「…たとえまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分の体を焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。」（コリント人への第一の手紙13章3節）

即ち、人が何をなしても、愛（アガペー・全く私心、下心のない愛）がなければだめだ、というのです。

人の行いの善悪は、つまるところ、その人が何をなしたかで決まるのでなく、いかになしたかで決まるのであります。ですから、愛がなければ何をなしても何にもならないと言うのです。

イエス様によって示された神の大慈愛の只中に立って生かされる信仰者は、何をなすかではなく、いかになすかを最も大切なこととします。と同時に為さねばらぬことへの勇気を与えられます。そして、たとえ為したことが小なりといえども、いかにそれを為したかという、その為したこころによって内面的な幸福を感じるのであります。

今、自分の愛する僕の病いのことでイエス様の前に絶対の服従と信頼で立った一人の人に、イエスは何をしたかでなく、いかなる態度で立っているかということの故に「あなたの信じたとおりになるように」という権威ある言葉を、やさしく与えることによって、その人の信仰に答え給うたのであります。

14

「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。
しかし人の子にはまくらする所がない。」

（マタィ福音書　8章20節）

これは、「先生、あなたのおいでになるところなら、どこへでもまいります。」と言った人に対して、イエス様が答えとして語られた言葉です。

ここでイエス様は、「なぜ私に従うのか」という人の動機の深いところへの反省をうながし給うのであります。

すぐさめてしまうような一時の情熱ではだめだと申されます。また損得の利害による計算からなら、得をするどころか、枕するところもないほどに苦労しますぞ!! と申されます。

イエス様に従うとは、一時の情熱に非ず、損得計算によるに非ず、ただ、イエス様への信頼と愛による内からのやむにやまれぬ生命(いのち)のうながしによるものであり、そのイエス様への愛と信頼を、人のうちに生じせしめるものは、イエス様の人に対するご愛そのものであると申せます。

わたしたちは自分の情熱でもって従うのではありません。また損得の計算によって従うのではありません。さらに自分の信心によって従うのでもありません。ただ、わたしたちは、イエ

ス様が、私達を愛し、救い、ゆるして下さる故に、また、それによって神の御愛の絶大さをハッキリと示して下さる故に、そのことによってわたしのうちに生じせしめられるイエス様への信頼と愛、即ち信仰の故にのみイエス様に従うのであります。その時、従うとは苦しみでありつつ楽しさがあり、不安がありつつ安心があり、不満がありつつ感謝が出来るのであります。

イエス様は、その信仰によってでなく、自分の情熱と損得計算によって従って来る者の姿勢について、そのものの正しい救いの故に、きびしく問いたもうのであります。

15

「なぜこわがるのか、
信仰のうすい者たちよ。」

（マタイ福音書　8章26節）

信仰とは信じ仰ぎ見るものを確かに知ることであります。

信じ仰ぎ見るものとは何か。それは真実そのものであります。では真実そのものとは何か、それは、生を喜こび死に安んずる道を与えて下さるものであります。

そのような真実は空中にあるのではありません。正に、イエス様こそ、この真実を身をもってわたしたちに示して下さったのであります。つまりイエス様は、わたしたちをつつむところ

の神の慈愛の真実を、その身をもって語り教え示して下さったのであります。

イエス様ご自身、十字架の死さえをもいとわず、わたしたちに及んでいるところの神のご慈愛の大きさと深さを、ご自身の身をもって証示して下さったのであります。

わたしたちは、自分の中に真実があるかどうかを内省吟味する必要などないのです。ただ、ひたすらイエス様が、その身で証示し給う神のご慈愛そのものを、一心に見て聞くのみです。

ですから信仰に於て大切なことは、真実を受容しようとする身の態度であります。

真実を受容しようとする身の態度とは、礼拝の一言でつきます。そして、その礼拝のこころは拝むこころであります。

拝むこころは、生死にあって永遠を慕う姿であり、自分の罪を悲しみつつ、神の真実の慈愛をおもい感謝する姿であります。この拝むこころによる礼拝によって、神の大慈愛の真実は、その人に体得されて行くのであります。

神のご慈愛の真実を信じ仰ぎみる信仰を増し加えられ、生を喜こび死に安んずる日々を歩ませられたく願うものです。

16

「悪霊につかれた者が、
墓場から出てきてイエスに出会った。」

（マタイ福音書　8章28節）

悪霊とは聖書に於ては、人間の生活の中に種々の禍をなす霊的存在として語られています。そして悪霊のかしらが悪魔（サタン）であるとも語られてあります。（マタイ12・24）

聖書を注意深く読んでみますと「悪霊」とか「悪魔」などというものが、古代人の無知からくる迷信であるなどと言って一笑にできないものであることがわかります。

例えば、イエス様が神の業としての福音宣教に出るに先だって、荒野で祈りに専念なさっている時、悪魔が来て次のような三つの誘惑をして迫ったと聖書に記してあります。即ち、一つは、物への慾と執着。二つには、権力と栄光への慾と執着。そして三つめには、苦労、努力をさけ安易な生活への慾と執着。よく考え内省する時、古代人であると現代人であるとにかかわりなく人間は、これらの三つの誘惑により堕落し、失敗し、他人に迷惑をかけ、正に悪魔の姿になってしまうのだと申せます。この自分の現実を見る時、「悪霊」とか「悪魔」とかが俄然（がぜん）、己れの身近な問題となって参ります。

この悪霊につかれた者は、だれも制することが出来ないとあります。（マタイ8・28。マ

ルコ5・3）本当にその通りだと思います。この力の前には理性など無きに等しい無力なものです。いかなる人間の知識も知恵も無駄であります。この問題については人類の栄光ある幾千年の歴史も決定的解決を何一つ与えてはくれませんでした。この観点から歴史を見る時人間は少しも進歩も向上もしていないと申せます。

パウロが自分の内なる悪について告白したことは決して他人ごとではありません。（ロマ、14・24）

本当に人間は悪の霊力にしばられた存在であります。（ガラテヤ4・3）そしてこれからの開放こそイエス様による福音なのであります。

17

「人々が中風の者を床の上に寝かせたままで、
みもとに運んできた。」

（マタイ福音書　2章2節）

中風で苦しんでいる人がいた。その苦しみを見た友人達が、彼をイエス様のもとへ床の上に寝かせたままで、幾多の困難をのりこえ苦労の末つれてきました。イエス様は、その病人の故でなく、その友人達のイエス様への信頼、つまり、イエス様は必ずその中風の者に深くかかわ

って下さるに違いないという信頼、更に、友人達の中風の者への友情の故に、「彼らの信仰を見て」「あなたの罪は許された」と言って中風の者を歩けるように立たしめ給うたのであります。

この中風で苦しんでいた人は友人達のイエス様に対する信仰によって救われたのです。

さて、人がイエス様を愛し、信頼し、神を信じるに至るには、先ずイエス様が自分を愛しつつんで下さるという愛にうながされてであります。（ヨハネ第一、4・10・19）このことを人がはっきりと自覚していればしている程、その受けた愛が自分と神との間だけにとどまるのではなく、自分以外の人々にも及ぶ愛であることに気づき、その神の愛、イエス様の愛と人々とが出会うことを念願するに至ります。（4・11）その時その人が自分の中にもつ他者に対する愛はもはや自分中心的な欲による愛ではなく、神への全き信頼の愛と他者のためにのみ願う愛となります。正にその時人は「神におり」「神も彼にいます。」（4・16）のであります。

このように神の愛にうながされ、自覚的に生きるものにとって他者に対する愛は当然のこととなり、信仰の証しとして自然に生れる行為となるのです。即ち少しも誇りとならず、そうせずにはおれないものとなるのです。（コリント第一、9・16）

結局、イエス様は中風の者を運んできた友人達の内にある神に対する真実の信仰を、その行為を通して見、それ故にその中風の者を立たしめ給うのです。これこそまことのとりなしの祈

りであると申せます。

18

「わたしが好むのは、あわれみであって、
ささげものではない。」

（マタイ福音書　9章13節）

イエス様はご自分について次のように申されました。

「わたしが来たのは義しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」（13節）と。この言葉は、直接的には当時の宗教家達であるパリサイ人や祭司などに向って語られたものです。

当時の宗教家達は、罪、汚れを作り、ある人たちを罪人、汚れた人として、それらの人々を嫌悪し、自分のみの清さを保とうとしました。ある人はこのような宗教家の姿を、「それは、感染するからといって、病人のもとに行くのを断る医者と同じ態度である」と申します。結局、彼らは自己中心的であり、従って他人も吾れもでなく、吾れのみであったのです。しかし、真実の宗教は、他人が救われてこそ自分の救いとなることを知っているものです。他人を忘れ嫌悪して、どれほど自己の救いに努力しても、そこには本当の救いはありません。

さらに彼らは、他人の誤りを指摘し、批評し、批判することはしても、決して励ますことはせず、手を惜しみ、共に苦しもうとしませんでした。しかし、イエス様は非難する前に、助け

出そうとされました。非難するだけでは、他人も吾れも倒れてしまいます。だが、他人と共に苦しみ、他人を助けるために自分の手をさしのべるなら、他人も吾れも立ち上がることができます。

まことの宗教は、吾れのためのみでなく、他人に吾れがかかわり、他人のために吾れをさし出すときに、吾れの救いが成ることの道理を教え示す宗教であります。イエス様はこのことをよくご存知であった故に「わたしは、ささげものより、あなたがたが他人にあわれみの心でもって共に、その他人と歩むことを好む」という旧約聖書の言葉を語られたのであります。

19

「誰も、新しいぶどう酒を、古い皮袋に入れはしない。
……新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。」

（マタイ福音書　9章17節）

イエス様の当時、ぶどう酒は皮袋に入れられました。新しいぶどう酒が少しずつ発酵し、膨脹するにしたがって袋の中の圧力が大きくなると、古くなった皮袋は破れてしまいますが、新

しい皮袋は弾力性があるので、圧力に耐えることができ、やがておいしいぶどう酒が生まれて来るのです。ですから人々は、新しいぶどう酒は必ず新しい皮袋に入れました。

では、イエス様が言われる新しいぶどう酒とは何なのでありましょうか。また、古い皮袋とは何を意味しているのでしょうか。

先ず、古い皮袋とは、自分の考え、自分の主義、自分がもっている価値観、又は無意味な習慣、しきたり、……そういったものにとらわれている「自分」を意味しています。また新しいぶどう酒とは、イエス様によって与えられる人間を本当に生かす神の命、まことなる愛、平安そのもののことです。ですから、このたとえでイエス様が語られることは

「あなたが本当に神の命に生かされようとするならば、〝我〟にとらわれて生きている自分をすてなさい。そして、神にある命を入れるにふさわしい自分になりなさい」ということです。

たしかに、神の確実なご愛と、まことなる命とに生きるためには「古き自分を脱ぎ捨てる」（エペソ4・22）ことが必要です。（コロサイ3・9）

パウロは「新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。」（コリントⅠ、5・7）と申します。そして、彼は、新しいぶどう酒を入れた新しい皮袋になった自分の姿について、「古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなった。」（コリントⅡ、5・17）と神さまの生命に生かされることに歓喜したのです。

20

「み衣にさわりさえすれば、なおしていただけるだろう、
と心の中で思っていたからである。」

（マタイ福音書　9章20節）

彼女は、イエス様の衣にさわりさえすれば、自分の病が治るであろうと思い、一途な気持でイエス様の衣にさわりました。その結果、彼女は長い年月自分を苦しめていた病から解放されたのです。

この出来事は、求むる事の大切さを私たちに教えています。求めないでは得られないということです。

しかし、求めることによって知り得る最も大切なことは、神はわたくしたちが求めぬ先から必要なものはご存知である。（マタイ6・7～8）という、神のまことに気づかされるということです。

この神のまことに気づかされること、これこそが神についての開眼であり、信仰から得る徳であります。そして、この神のまことそのものに、思いわずらう自分をゆだねる時、思いわずらう古い自分から自分は解放されるのであります。ですから「真理は、あなたがたに自由を得させる」（ヨハネ8・32）とイエス様は申されるのです。「真理」とは「まこと」ということ

です。ここで注意したいことは、神がまことをもっていられるというのではありません。神即ちまことということであります。結局、神を求めるということは、まことを求めるということであります。

イエス様は、「わたしは命であり、道であり、真理である」（ヨハネ14・6）と申されます。そして、そのわたしによらないでは神の国即ち、神のお恵みのご支配の事実そのものが見えないと申されるのです。

わたしたちはだれもが　まことを求むる思いがあります。その内なる求める思いを消すことなく、素直に求むるとき必ずまことそのものが現実にすでに、自分の足下にあることに気ずかしめられるにちがいありません。そのとき、わたしたちは新しい世界を見るのです。

21

「イエスは十二弟子を呼びよせられた」　（マタイ福音書　10章1節）

わたしたちはだれも自分一人では何もできません。何かを用い、だれかの協力を得てこそ「出来る」のであります。

さまざまの問題の中で生きるわたしたちに、慈愛の御手をさしのべ、まことの幸いへと導こうとされる神様の救いのわざも、そのわざに参与する多くの人々の働きがあってこそ、はじめて完成されるのであります。

神様のわざを完成するためには、さまざまな人が必要であります。「外に出て行く者、家にとどまる者、手足を使う者、頭脳を使う者、世の注目を集める者、誰にも知られずに働く者…」そして、それらの人々が〝他人は何をしてくれるだろうか〟という思いではなく、〝わたしは、神のため他人さまのために何が出来るだろうか〟という思いをもって働かせていただくところに、人々の世に幸いと救いが至るのであります。

神は、このような思いでもって神の手となり足となる者を求め招いていらっしゃいます。

イエス様に招かれた十二人の人々は普通の人々でありました。しかし、一人一人皆、それぞれに異った性格を持ち、職業を持ち知恵を持っていました。彼らがそれらを神の働きのために献げた時、神は、それぞれの持っているものを最大限に生かし用いて下さったのであります。

自分のためのみではなく、また他人のためのみでもなく、神様のご慈愛による世の救いのために、自分が用いられる。これは自分を最大に生かし、自分のため、他人のためにもなることであります。このように神様に用いられるところに、人間の本当の生き甲斐があるのだと申せます。

神の慈愛のわざへ招かれた人生、そのために用いられ、任命された人生、これぞ栄光ある人生だと申せます。

22

「わたしがあなたがたをつかわすのは、羊をおおかみの中に送るようなものである。だから、へびのように賢く、はとのように素直であれ。」

（マタイ福音書　10章16節）

イエス様は、神様を信ずる善良なる人々のことを、おとなしくて敵の攻撃に無防備な動物である羊に例えておられます。そして、その善良なる羊が出て行って神様のことを語るとき、それをさまたげようとする人々がおり、その人々のことをおおかみだと申されます。つまり残忍で貪欲なるおおかみのような人々が、多くいるというのです。

たしかに、この世は時として無慈悲で強欲であり、善良さなど持って歩めば、ただうろうろするばかりであるようなところです。だから、イエス様は、へびのように賢く、はとのように素直でありなさい。と申されるのです。へびとは、知恵深く、よく時と場とをわきまえ、相手を深く知って行動する知恵のことであり、はととは、ことさらに人を刺激することなく、あくまでも善意で、にゅうわでいること、という意味です。つまり、神を仰いで信仰に生きる人間は、ただお人よしだけでなく、深く時と場と相手をわきまえて、行動する知恵を、しっかりと

身につけることによって、神様のご愛が人々に伝わるようにしなさい。とイエス様は申されるのです。

パウロはパリサイ人の独善的な行為に対して「彼らは神に対して熱心である。その熱心は深い知恵によるものではない」と申しました。（ロマ10・2）

「もし信心があって知恵なくば無明を増し、知恵ありて信心なくば邪見を増す」と仏典にもあります。

信心に知恵が加わり、又知恵に信心が加わってこそ、人は正しく生き、この世に本当の平安を生み出すことができるのだと信じます。

相互に信心に知恵を加えたいと思います。

23

「一つの町で迫害されたら、
他の町へ逃げなさい。」

（マタイ福音書　10章23節）

「へびのごとく賢く、はとのように素直でありなさい」とイエス様が教えられたことを先に学びました。

神様は御愛に満ちていられるのだから、どのような場合でも、どんなことをしても、お守り下さる。神様は全能だから、どんなことも出来る。聖書にそのように書いてある　などと言って無茶を承知で行動することを、あたかも信仰深い勇気ある姿だと、とんでもない思いちがいをしている人がいます。それは全く思慮なき無謀なる行い以外の何ものでもありません。

つまり、はとのような従順はあっても、へびのような知恵なき姿であると申せます。

信仰は知恵と、知恵は信仰と相交ってこそ正しく成長して行くのであります。

「もし信心あって知恵なくば無明を増し、知恵あって信心なくば邪見増す」という言葉を今一度かみしめてみたいと思います。

正しいから、理くつに合っているから、為さねばならないのだから、ということだけで行(おな)ったり、言ったりしてよいものではありません。時と場と相手とをよく知りそれにふさわしく言ったり、行(おな)ったりすべきです。それが知恵ある行為であります。

「一つの町で迫害されたら他の町へ逃げなさい」とイエス様は申されます。逃げることは常に不信仰ではありません。「危険からあえてのがれることは、危検に直面するよりも勇敢な行動である。」と言った信仰深い人の言葉がありますが、全くその通りだと思います。

「人は自分の愚かさによって道につまずき、かえって心のうちに神をうらむ」、まさにこれこそ、知恵なき信仰者の代表的な姿であります。（箴言19・3）さらに「あなたがたの信仰に

徳を加え、徳に知識を、知識に節制……」（ペテロ第二、1・5）とあることに眼をとめたいと思います。

24

「からだを殺しても、魂を殺すことのできないものを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅す力のあるかたを恐れなさい。」

（マタイ福音書　10章28節）

宗教とは、宗とすべきことを教えるものであり、その宗とは心根であり、また生根でもあります。それ故に、宗教とは人の心の根本とすべきもの、また人が生に於て根本とすべきものを教え与えるものであります。

わたしたち人間が、それぞれ自分の生の根本とすべきもの、それぞれが自分の心根とすべきものとは、神の慈愛であります。この神の慈愛は、わたしたちの一切のおもいを越え、また、わたしたちの一切の考えに先んじて、現にわたしたちの足下にあって、わたしたちを支えているのであります。たとえ、その慈愛を、わたしたちが認めずわたしたちが否定してもしなくても、そのことに一切　かわりなく現に、わたしたちの足下にあるのであります。それゆえにこ

そ慈愛なのであります。

この神の慈愛に開眼させられ、その慈愛が己れの過去、現在、未来永遠まで及び及んでいること、それゆえにその慈愛にあずかっていることを発見する時、神を崇むる信仰がおのずと生じてくるのであります。正に自から然させられるのであります。そこに於て手を合せ祈ること、これが礼拝であります。この神の慈愛の手中にあることの発見は、己れの人生の根本に平安をもたらします。と同時に、神の前に畏れをいだかされる生となるのであります。

人による保障ではない、神による保障、己が命の帰り行くところとしての神の慈愛の只中に今生かされていることについての神に対する「畏敬」。

「神を畏れることは知識のはじめである」（箴言1章7節）

今わたしたちは各々、自分の人生に於て真に畏れるものを見出し、まことの平安とまことの勇気とを得しめられて、日々生かされたいと思います。

25

「わたしよりも父または母を愛する者は、
わたしにふさわしくない。わたしよりも
むすこや娘を愛する者は、わたしにふさ
わしくない。」

（マタイ福音書　10章31節）

このイエス様の言葉はきびしい。しかし、父も母も、むすこも娘もすべてかえりみることなく、それらをふりすててわたしに従え、さらば救われん。とイエス様が命じられる故に、この言葉がきびしいと思うなら、その受けとり方はいささか的はずれであると申せます。

では、一見きびしい言葉だとおもわれるイエス様のこの言葉のこころは何なのでしょうか。一口に申しますと、第一にすべきことを第一にすべし、ということであります。

わたしたちが何時も共に祈る主の祈りの一切に、「御名をあがめさせ給え」というのがあります。この祈りの意味は、わたしたちの生きる一切を、支え給う神さまのご慈愛そのものに、わたしたちが先ず、感謝の心と思いを向け、その後に、他の一切のことをする者であるようにして下さい。ということです。つまり、わたしの存在の根拠、わたしの人生の支え主に先ず心と体とを向けることを第一とし他のことは、そのうえになすのであって、この生活の順序は、

絶対にゆがめてはならず、また、ゆがめては生活は本当に成り立たず、さらに、そうあることが人間としての自然なのであると言えます。

ところが、わたしたちは、この順序を全く忘れ、第二にすべきことを第一とし、第一にすべきことを第四、第五にしようとするどころか、全く忘れさってしまっている現状です。この生活態度の誤りの結果は必ずいつか刈りとることになるにちがいありません。

26

「盲人は見え、死人は生きかえり、足なえは歩き、
らい病人はきよまり、耳しいは聞え貧しい人々は
福音を聞かされている。わたしにつまずかないも
のは幸いである。」

（マタイ福音書　11章5・6節）

「わたしが聞きたいのは、これが真理であるという主張ではない。ここに真実があるという報告である。」と言った人がありますが、正にその通りであります。

イエス様は、真理の主張者ではなく、真実の身証者であります。真理の主張は、人の心をかたくなにし、われもひともその主張で縛りつけ、さらに敵味方を作り真理のためという争いま

で生むに至ります。しかし、真実ある心と行いとは「全ての人々の身心をうるおして、さわりなき立場を恵む」のであります。

ヨハネは自分の殺される時が迫っているのを感じて、獄中から、イエス様の真実を再確認、再確信の意味をこめて「きたるべき方はあなたですか」という問いを出しました。それに対してイエス様は、問をたずさえて来たヨハネの弟子に確信を持って言われます。「行ってヨハネに私が何を言ったかでなく、私が何をしているかを報告しなさい。私が何を主張したかではなく、実際に何が起っているかを告げなさい」と。

確かに、イエス様の真実にふれるとき、目がひらかれます。自分の本当の姿について、人間について。足をふみはずして人間の道からはずれている弱い人を助けて下さる真実を得ます。罪によどれている者は清められ、ゆるされ立ち上らされるに至ります。イエス様による真実の愛は、死をのりこえさせて永遠の平安の御手の中に人々を保持するに至ります。

ヨハネは、イエス様が説く道理に於てではなく、また、その人格に於てでもなく、イエス様が、その言動に於て身証される真実を聞き、見ることによって安心し、それに自分を投げ込んだのであります。

27

「全て重荷を負って苦労している者は、
わたしのもとに来なさい。」

（マタイ福音書　11章28節）

まこと無き世に、変わらぬまことがある。その変わらぬまことを拝み、信じてゆく、ここに信仰に生きる人間の道があります。

変わらぬまことは、「すべて」の人々に及ぶのであります。

変わらぬまこととは、「すべて」の人々にかぎりなく及ぶ愛そのものであります。

イエス様は、このかぎりなく及ぶ愛そのものとしてわたしたちに語りかけ、泣く人と共に泣き、笑う人と共に笑い給うのであります。

イエス様に於て示される神のご愛は豊かであります。ご愛が豊かであるとは、同感力が豊かであるということであります。

わたしたちは誰もが、人生の重荷を負うて苦労して生活しています。他人から負わされる苦労、自分自身が自分で負う心配という苦労、他人からでもなく自分からでもなく、生きているという故に必ず一息ごとに負うている苦労。

「苦労している人は　わたしのもとにきなさい。」と語りかけて下さるイエス様。

イエス様は「休ませてあげよう」と申されます。「休む」とは、何もしなくてもよいようにしてあげよう、というのではありません。安心して苦労にとりくめるような命、生きる命をあげましょう、ということです。どこまでもどこまでも一諸に参りましょう、ということです。も早、ひとりぼっちではない。変わらぬまことあるお方が、どこまでも、いつまでも一緒して下さる。

このようなお方にお出会いすること、これが救いにあずかるということであります。

28

「わたしが好むものは、あわれみであって、
いけにえではない。」

（マタイ福音書　12章7節）

〝あなたは、いけにえを好まれません。たとえわたしが捧げものを捧げても、あなたは喜ばれないでしょう。
神の受けられる捧げものは破(くだ)けた魂です。
神よ、あなたは破(くだ)けた悔いた心をかろしめられません。〟（詩篇51章16・17節）

〝主は心の破けた者に近く、魂の悔いくずおれた者を救われる〟（詩篇34・18）

自分の力で自分を持ち上げることは絶対に出来ません。もし、出来ると思う人がいるなら一度ためしてみられるとよい。勿論、何かにすがって手を使い、足を用いてならば自分を持ち上げることは出来ます。つまり、わたしたちは自分以外の何かにすがらなくては自分自身を決して持ち上げることは出来ないのです。

にもかかわらず、わたしたちは自分で自分自身を持ち上げられると信じ、持ち上げようとしています。

わたしたちは、持ち上げてもらうことによって自分は持ち上がるのです。

わたしたちは、自分で自分をどうすることも出来ない者なのです。生れ、生き、死すること。出会い、別れること。これらはわたしの人生の出来事でありながらその実、わたし自身でどうすることも出来ない事がらです。

自分の人生は自分にとって暗なのです。決して誰も見通すことなど出来ないのです。自分の内に光り無しと知る時、自分を照らして下さる光りがあることに開眼されるのであります。自分の力で神の前に立とうとすることの限界を覚ゆるとき、立てずして泣く者を、そのままで抱きかかえて、立つことを得しめさせて下さる神の愛を見ることが出来るのです。

神は破(くだ)けた魂をのみ受けいられる。

29

「聖霊を汚す者は許されない」

（マタイ福音書　12章31節）

「聖霊を汚す」とは、聖霊をないがしろにするということなのであります。

わたしたち人間は、体、知恵、心、そして、霊、というものを持って生きています。これらのうち、神様の真実をお受けすることが出来、それに応えてゆくことが出来るものが、霊（プニューマー）なのであります。

では、神様の真実は何によって私たちの霊に届くかと申しますと、神ご自身の働きである聖霊によるのであります。ですから、「誰も聖霊の働きかけがなければ、神を認めることは出来ない」（コリント第一、12・3）と聖書にあります。聖霊の働きに応じるのは、わたしたちの霊なのであって、わたしたちの知恵でも心でもありません。

しかし、わたしたちの日常は、知恵をみがき、心を高めても、自分の内なる霊については全く無関心で、何一つ霊を養い育てるために配慮をしていません。故に、今や霊の働きは弱まり、神の聖霊の働きかけに応える力を失い、その霊的感覚は死んでしまっています。

人間の人間たるしるし、人間の人間らしさとは、神の真実の語りかけである聖霊を霊でもって聴くこと、応えるところにあるのであります。

生きていることが生かされていることである、ということに気づくのは霊によります。

自分の思想（考え）による真理や善や美でなく、まことの善や美がおめぐみとしてあり、そのおめぐみに生かされるところに、本当の平安があることに気づくのは霊によるのであります。この霊の働きを失い聖霊の働きをないがしろにする者は、自分自身で神の恵みから自分を遠ざけていることになるのです。ここに、「聖霊をないがしろにする者は　ゆるされない」結果を招くことになるのであります。つまり自業自得ということです。

30

「天にいますわたしの父のみこころを
行う者はだれでも、わたしの兄弟、
また姉妹、また母なのである。」

（マタイ福音書　12章50節）

わたしたちはいつも、われ、ひと。身内、他人などと分けてしまいます。これは、わたしたちの「我」のなせるわざであります。

「我」でものごとにかかわるということは、自分の身体、自分の知恵でものごとを考えるということなのであります。

しかし、イエス様は、自分の身体や自分の知恵でもって、ものごとを考えたり行動したりなさいませんでした。では、どこで考えられたのかと申しますと「霊」で考えられたのであります。

わたしたちは、身体、知恵、霊という三つのものから成り立つ一人の人としての「わたし」であるということを以前に記しましたが、霊は我を超えているものであります。ですから霊の思いは、時として我をつき上げてきます。我の利己的な言動の誤りを正そうとします。

身体や知恵は神を認めませんが霊は神を認め受け入れます。(コリント第一の手紙2・10～16)

イエス様は自分の身体、自分の知恵、即ち我で語ったり行なったりなさいませんでしたから、自分の母、自分の兄弟、自分の知っている人、自分の好きな人……等々と人を分けへだてをなさらなかったのです。人を分けへだててみたり、かかわったりすることは正しくないから人を分けへだてをされなかったのではなく(それは知恵の立場)人を分けへだてをしないことが、イエス様にとっては自然であったのです。この霊の世界があること、しかも、それはお恵みとしてあること、そのお恵みが、我に立つことしか知らない、また、我をおし通そうとすることしか知らないわたしたちに及んでいることを、イエス様はお示し下さったのです。

31

「種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは、三十倍にもなった。」

（マタイ福音書　13章8節）

〝下農は雑草を作り、中農は作物を作り、上農は土を作る〟という言葉が、農業をする人達の間にあるようです。上手に農業をする人は、先ず作物を豊かに稔らせる土台であるところの「土」作りを、しっかりとする、という意味です。

たとえ、どれほどの成長力があり、生命力のある種といえども、その種が落ちる土地の状態によって、種の生死は決定されてしまいます。

種にとって良い土地とは、どういう土地なのでしょうか。それは、種が本来持っている生命力、成長力を存分に発揮させる性質をもっている土地、であります。

イエス様が播かれる種とは、イエス様の言葉そのものであり、土地とは、その言葉を受ける私たちの心そのもののことであります。私たちの心そのものが、かたくなに閉されているならば、何も聞かなかったことと同じであり、何事も起こりません。また、私たちの心が浅薄で軽卒なものであるならば、その言葉の本当の力にふれることなく、見すごし、聞きすごしてしま

うに至ります。さらに自己中心的な心も、自分勝手な聞き方、受けとり方をして、結局は、その言葉を正しく理解しないままで終ることになります。

しかし、イエス様の語られし言葉を、素直に聞き受け取る者には、その言葉の持つ本来の生命力、成長力が働き出して、その人の中でどんどん、ぐんぐんと育ち、その人に勇気と希望と平安と、さらに智慧を与えるに至ります。そしてその人に、今まで見ることのできなかった新しい世界を、見せてくれるにちがいありません。その世界とは、神のお恵みの世界であります。その時、その人は、その世界を自分の人生の足場、土台として、新しい人生を歩み出すのです。

32

「毒麦を集めようとして、麦も一緒に
抜くかも知れない。収穫まで、両方
とも育つままにしておけ。」

（マタイ福音書　13章29・30節）

本ものがあれば必ず偽ものがあります。
しかし、本ものと偽せものとの区別は簡単には出来ません。

本ものと偽ものとの区別を急いですると、偽ものを本ものと思い込んだり、本ものを偽ものと誤って断定してしまったりすることがあります。

本ものと偽ものとの区別をするには、時間をゆっくりかけて待つことが最も大切だと思います。時間をかけて、ゆっくりと気長く待っていると、こちらから区別をしようとことさらに努力しなくても、向う側から己れの正味の姿を現して来るものです。そして、最後には自滅して行く場合が多いようです。

「おおいかぶされているもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない」（マタイ・10・26、ルカ12・2）のであります。さらに、自分自身の重さで泥沼の中に沈んで行くように、自分のかたくなさの罪で偽りの故に、「滅びるものだけが滅んで行く」（ヨハネ17・12）のであります。

神は愛であります。真実を語り、手をさしのべて待って下さいます。誰も滅ぼしたりはされません。

しかし、神の愛の語りかけに耳をふさぎ、さしのべ給う恵みの御手をふりきって、自分の道に進み行く者には、涙して待つ以外には為すすべがありません。その人は「自分のまいたものを自分自身で刈りとることになる」（ガラチヤ6・7）のであります。

わたしたちが人生の最後に於て、神の前で何を刈取ることになるかは、今日の一日の生き方

にあります。

33

「天国は、畑に隠してある
宝のようなものである。」

（マタイ福音書　13章44節）

天国とは、神様のご慈愛のお恵みが、充ち充ちて働いているところ、ということであります。世間では、天国というと、人間が死んで行く良きところというように理解されているようですが、イエス様が申される天国とは、先述の通り、神様のご慈愛が充ち充ちて働いているところ　ということであって、人が死んでから行く良きところということに限られてはいません。ですからイエス様は、「神の国（天国）は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」（ルカ17・21）と申されます。　（マタイは天国、ルカは神の国と言うが、共に同じことである）

従って、天国とは行くところではなく、見いだすべきところなのです。神様のお恵みとしてのご慈愛に充ちた働きは、わたしどもの日々に充ち充ちて在るのであります。しかし、わたしたちは、そのご慈愛のかずかずに全く気ずくことなく、すごしています。即ち、天国はわたしたちの足元に現在するのですが、わたしたちはそれと気ずかずに忘恩の生活をしているのです。

いうなれば、そのような忘恩の生活をしている私たちから見れば、天国は畑に隠してある宝のようなものだと申せます。ですから、その宝はすでに現存するのですから、ただ探し、求める者にのみ見い出されるのだ、と申せます。その意味で「求めよ、さらば与えられん。さがせさらば見い出さん」（マタイ7・7）とイエスさまが申されることが、よくわかります。

求めるとは、一生懸命に真実を見失うまいという思いをもって生きることです。そのとき、真実が自他を超えて、自他をつつんでいるというお恵みの宝が見い出されて来るのです。

34

「天国のことを学んだ学者は、新しいもの
と古いものとを、その倉から取り出す一
家の主人のようなものである。」

（マタィ福音書　13章52節）

一つの主義、一つの教えにこりかたまってしまう人があります。こりかたまるとは、その主義、その教えの奴隷となるということです。

イエスさまは、いかなる主義・教え、どのような人、さらに自分自身にすらも奴隷になることなく、本当の自分のうえに立つ全き自由人であることを説き、イエスご自身そう生きること

によって、その立つべき自由人の一点をお示し下さったのであります。

わたしたちは他人の主義主張、教えなどの奴隷にはならなくとも、自分の考え、自分の主張、自分の判断、自分の意見という「我」の奴隷になってしまいます。そうすることが、自主独立、全き自由人だと思い込んでしまいがちですが、やはり奴隷であることにはかわりません。つまり、自分自身にこりかたまっているのです。パウロは自分をも含めた人の奴隷となるな（第一コリント7・23）と申します。

では、他人からも、自分自身からも解放された状態とはどのようなものなのでしょうか。それこそ「新しいものと、古いものとを、その倉から取り出す一家の主人のようなもの」であります。古さにとらわれず、新しさにもとらわれず、古さと新しさとを自由に用い重んじ使う主人の在りようです。それならば、その在りようはどうして生み出されるのでしょうか。パウロは申します。「わたしは貧に処する道をしっており、富による道も知っている。わたしは、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている。わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる」（ピリピ4・12―13）イエスさまを通して、神に覚するとき、このパウロの境地が現れ見えて来るのです。